

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520844

研究課題名(和文) フランスの頭蓋変形慣行に関する歴史人類学的研究

研究課題名(英文) Study of Historical anthropology on French deformation skull custom

研究代表者

蔵持 不三也 (Kuramochi, Fumiya)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：40195540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、伝統的なフランス社会における「奇習」、すなわち頭蓋変形(トゥールーズ型頭蓋)慣行の起源・実態・意味を調べることにある。研究代表者はまず初年度にパリの国立自然史博物館の人類学資料室に所蔵されている変形頭蓋約20点を撮影するとともに、その特徴などをフィリップ・メヌシエ博士らの協力を得て調査した。翌年度はパリの国立図書館や古文書館で関連資料を収集し、平成26年度はマルセイユの地中海文明博物館で変形頭蓋の実例数点を調べ、同時にこの変形頭蓋研究に巨歩を印したパリ人類学会の形質人類学者ポール・ブロカなどの論文を入手し、民俗文化のなかでこの慣行がどのように位置づけられるかを研究した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research is to study the actual situation, a meaning in the origin of "a strange custom" in French traditional society concerning the deformation skull (crâne toulousain). At first the study representative photographed 20 examples of such skull possessed in the anthropology library of the National Museum of Natural History of Paris, and I got the cooperation of Dr.Philippe Menecier and others of the Museum and investigated their origin and characteristics. In next year, I collected related documents in the National Library and the National Archives in Paris, and studied it how this custom was placed in folk-culture. I checked several points of heteromorphic cranial examples in Mediterranean Civilization Museum of Marseille in 2014 and obtained articles such as physical anthropologist Paul Broca of Anthropological Society of Paris which set a brilliant achievement for this deformation skull study and clarified its historic and social background.

研究分野：歴史人類学

キーワード：フランス 頭蓋変形慣行 民俗文化 形質人類学 トールーズ型頭蓋

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで長きにわたってヨーロッパ、とくにフランスの民俗文化を研究してきたが、そのなかで「合理的社会」とは似て非なる伝統文化にしばしば出会った。そのひとつが、今回の主題である「頭蓋変形」慣行である。はたしてそれは社会的にいかなる意義を帯びていたのか。面妖なことに、民俗学や文化人類学からはほとんど等閑視されてきた。本研究はこの年来の疑問を追求し、民俗文化の深層に切り込もうとするところから出立した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、したがって頭蓋変形慣行の歴史的・社会的・文化的・象徴的な意義を通して、フランスの民俗文化のありようを実体的に析出しようとするを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、以下の2点がある。

変形頭蓋の実例調査

先行研究(とくに形質人類学・解剖学)のリサーチ。

ではフランス各地の研究所や博物館ないし資料館に保存されている変形頭蓋を取り上げて、その来歴や変形時期、実態、歴史の変遷などを調べる。では後述する医師で形質人類学者でもあったポール・ブロカなどの研究に着目し、その言説から頭蓋変形のありようを調べる。

4. 研究成果

頭蓋変形慣行の研究は、世界的にみて19世紀中葉以降に本格化している。フランスにおいてその指導的立場にいたのが、1859年にパリ人類学会(Société d'Anthropologie de Paris)を創設し、72年にはその学会誌《Revue d'Anthropologie》を創刊し、さらに76年にはパリ人類学学校も設立したポール・ブロカである。彼は人体測定法を確

立し、それが民族性の優劣基準に用いられ、自らの人種差別的な発言も手伝ってラシストとして指弾を浴びたりしている。また、1848年には自らが立ち上げた自由思想学会がダーウィンの自然淘汰説を評価して、当局から青少年に唯物論的な悪影響を与えるとして告発すらされている。だが、こうしてフランス形質人類学の確立に重要な役割を果たした彼は、1871年学会誌《パリ人類学雑誌》において、有名な論考を発表する。「頭骨のトゥールーズ的変形について」がそれである(Paul BROCA: Sur la déformation toulousaine du crâne, in Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris, II^e série, t. 6, 1871, pp. 100-131.) この論考は同年8月17日の学会講演を再録したものが、その冒頭、彼は人類学会の資料館に自ら提供したトゥールーズ生まれの老女の頭部と脳の復元模型について触れている。それによれば、数ヶ月前にパリのピティエ病院において74歳で病没した1797年生まれのこの女性——プロカの命名で「トゥールーズヌ(トゥールーズ女性)」——は、当時としてはほぼ平均的だという身長1.53メートル。加齢によって脳が多少萎縮しているものの、脳回(大脳皮質の「皺」の隆起部位)は通常だとしている。だが、その頭蓋は幼い頃にヘアバンドと添え木によって前後に長く変形されていた⁽²⁵⁾。ブロカはこの頭蓋を典型とする変形を「トゥールーズ型頭骨(crâne toulousaine)」ないし「トゥールーズ型変形(déformation toulousaine)」と命名している。

本研究はパリ自然史博物館などに所蔵されているこれらの変形頭蓋の事例の特徴や来歴を数多く分析し、さらに慣行自体の歴史的な変遷などに着目しつつ、民俗文化の中に位置付けた。そこで明らかになった事実は、以下のように集約できるだろう。

おそらく医聖ヒポクラテスの著作に初出する変形頭蓋(長頭)自体は、いったいにアッカルチュレーション、すなわち民族移動——フン族やキンメリア人など——と結びつけられ、ときに貴族的なステータス・シンボルとみなされてきた

が、バスク地方など地域によってはそれ以前からみられた。

とくに19世紀中葉以降、変形頭蓋の研究は、墓地からの出土遺骨や精神科病院患者の頭骨に学問的な関心を示した形質人類学者たちの分析によって著しく発展した。だが、その研究の多くはフランス南西部など特定の地域住民の頭蓋に基づくものであり、フランス人の民族的出自や時代的・地域的な偏差を説明しようとするものであり、民衆生活のなかでそれがいかなる意味を帯びていたのかにかんする考察はほぼ皆無である。

形質人類学が明らかにしたように、一連の頭蓋変形例は男性よりも女性に圧倒的に多い。だが、それが何を意味するかを示す積極的なデータは見当たらない。

この慣行は医師や知識人たちからしばしば俗信的・非科学的な蛮風として非難されてきたが、これらの非難は近代的な価値観や衛生観によるものであり、そこではなぜそれが存続したかについて、つまり民衆文化におけるその意味までは考察されていない。

きわめて面妖なことに、こうして社会的に指弾を浴びながら、頭蓋変形を禁ずる法令が一度も出されていない。この事実は、行政当局や教会という権威の中核が、慣行を黙認していたとも受け取れる。

では、こうした研究史の瑕疵を埋めるためには、いかなる視座が求められるのだろうか。それにはやはり人々の生活そのものに目を向けなければならないだろう。

フランス民俗学には妊産婦や出産、乳幼児・幼児についての膨大な資料や研究の蓄積があるが、その代表的な著作としては、名著『通過儀礼』でつとに知られるA・ヴァン・ジェネップ(1873-1957)の膨大な『現代フランス民俗入門』がある。フランス全土の民俗文化を網羅する予定だったが、はずのこの大著は残念ながら未完のまま終わった。しかし、文字通り「揺籃から墓場まで」の民俗を

扱ったその第1部第1巻において、この頭蓋変形を含む新生児のかかわる民俗についてこう述べている。

はじめての入浴や産着の着装、頭骨の変工、さらに一般的に行われている血液循環を活性化させるための全身マッサージは、通常、(新生児の)ひとりないしふたりの祖母が見守るなかで、助産師あるいは老婆の特権に属している。さまざまな著者たちはその詳細を論じているが、それが明らかにしているところによれば、誕生から洗礼式までのあいだ、子供は極端なまでに有害な影響をこうむるとはいえ、そこでは実践医術が呪術を凌駕しているという(A. Van GENNEP: *Manuel de folklore français contemporain*, t. 1-1, Picard, Paris, 1943 / 82, p. 122)。

この一文からすれば、フランス民俗学を大成させたひとりであるヴァン・ジェネップにとって、乳幼児への頭蓋変形は(母親との皮膚共生を断ち切る)入浴や(身体をきつく縛り付けるような)産着の着装、さらにマッサージと同様の措置であった。おそらく彼は、それが地域的かつ伝統的な身体観に依拠する母親の配慮であって、けっして無知蒙昧ゆえの呪術などではない。むしろ誕生直後の乳幼児の危うい身体を矯正・保護する、一種の実践医術だというのだ。たしかに危険は伴うとしても、それ以外に何が乳幼児を守ってくれるのか。素朴な不安を解消するには、ほかに何かがあるのか。そこには「他者」の眼差しからはつねに非難の対象となるが、過不足なく地域的なイマジネール(集団的想像力)が働いている。

同様に、現代のフランス民族学者であるフランソワズ・ルークスも、身体加工をイマジネールから論じている(フランソワズ・ルークス『肉体——伝統社会における慣習と知恵』、蔵持・信部保隆訳、マルジュ社、1983年、70頁)。

人相学が頭や顔の特徴を説くかぎり、人びとが最初に子供の頭蓋形や鼻翼に関心を抱いたとしても、何ら不思議なことではない。(・・・) 結局のところ、肉体とは、一般大衆の考えからすれば、ひとつの全体にほかならなかった。すなわち、目に見える一部分の特徴が、隠された部分まで明らかにしてしまうのである。

パラケルススの署名理論を引き合いに出して肉体に換喩的な特性をみるルークスは、たとえばその事例として鼻と性器との関連をとりあげ、伝統的な社会では、肉体は乳幼児の段階から鍛えられ、教化され、社会化されなければならなかったと指摘している。彼女の擧に倣っていえば、まさに頭蓋変形とは地域社会における社会化の一過程ということになる。それをしも通過儀礼と呼ぶべきかどうか、確証がないため、にわかには判断できないが、たしかに一部の地域や時代では、この変形が単なる「蛮風」を超えて、社会的な成員となるための手続きとしての重要な意味を帯びていたとも考えられる。つまり、こうした「蛮風」が外部から繰り返非難されながらも存続してきた理由のひとつがここにあるのではないか。

さらにいえば、現代においてさえ、出産まもない母親たちは、我が子の容貌や健康に常態ならざる不安を抱き、その効果が科学的に何ら立証されない、少なくとも宣伝文句ほどに効能がないような手段ですら、安心感と引き換えに利用している。たとえばいわゆる「絶壁頭」(斜頭症)防止のためのドーナツ枕やモルディング・ヘルメットなどである。それを母親の短慮と誇ることは到底できない。とすれば、こうした現代の配慮と往時の頭蓋変形とのあいだに、いったいどれほどの差があるといえるのか。民俗史家のジャック・ジェリは、伝統や慣習、そして俗信」によってのみ維持されてきた頭蓋変形が、最終的に第1次世界大戦後、さながら集団的な無意識がこの慣行をおぞましものとして抑圧していたかのように消滅したとしている⁽⁴⁹⁾。筆者の用語法では、この集団的な無意識とは、まさに個人的な想像力の謂であるイマジネー

ションを規制するイマジネールということになるが、おそらくジェリは集団的な無意識がときに人々を慣行に従わせ、ときにこれを廃止させるというメカニズムを内包している点に気づいていない。

歴史を語るにはつねに作法がある。対象そのものに限りなく接近する眼差しと、対象の周域ないし深層へと向かう眼差しを往還させるという作法である。この遠近法によってしかじかの歴史的事象と向き合えば、しばしば定説の危うさがみえてくる。表裏や正負が逆転することもある。歴史の諧謔とはひとえにこうした反転のメカニズムに起因する⁽⁵⁰⁾。遠くから見れば蛮風として指弾された頭蓋変形も、近くに寄れば、我が子の行く末を切望するいつに変わらぬ母親のひたむきな想いと吐息とが感じられる。そこでは歪像が正像へと過たず反転する。イマジネールに規制されながら、精一杯のイマジネーションでそれに抗しようとする。頭蓋変形が時代のイマジネールで断罪されながらも存続した背景には、禁令の対象にならなかったことに加えて、おそらくそうした生への意識があったはずだ。イマジネールが規制力を帯びているかぎりにおいて公的な文化の基盤であることはいうまでもないが、民衆は自らのぎりぎりの生を賭してそれを突き抜ける。まさにこれこそが学問的な了解をはるかに凌駕しうる私的な文化、すなわち民衆文化のありようといえるのかも知れない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

蔵持不三也「歪像の文法 フランスの頭蓋変形慣行に関する歴史人類学的研究」、人間科学研究、vol. 28, no. 2, 早稲田大学人間科学学術院(近刊)

〔学会発表〕(計1 件)

Fumiya KURAMOCHI : Sur le crâne toulousaine, EURETHNO, 2014 年、モンペリエ大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蔵持不三也（研究代表者）
KURAMOCHI Fumiya
早稲田大学人間科学学術院教授

研究者番号：40195540

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：